第８号（平成３０年１２月）
日野町教育委員会

日野中学校区 コミュニティ・スクール情報

2018全国コミュニティ・スクール研究大会 in 三笠

１０月１２日（金）、北海道三笠市で開催された「2018 全国コミュニティ・スクール研究大会 in 三笠」に参加しました。

大会テーマ「「ふるさと回帰」～地域の未来を創る子どもを育むコミュニティ・スクール～」のもとで、分科会[実践発表]、全体会[基調講演、パネルディスカッション等]が行われました。全国各地での取り組みに学ぶべきことが多くありました。

≪第１分科会≫「コミュニティ・スクールの効果的な導入」

コーディネーター　北海道大学　教授　　出口　寿久

【コーディネーターより】

コミュニティ・スクールの導入が進んでいるが、議論できるコミュニティ・スクールにしていかなければならない。年 4 回開催が多いが、問題なのは何を議論するかということである。未だに学校支援の企画、調整で終わっているところが多く、コミュニティ・スクールの目的を明らかにして、当事者意識をもって参加していく必要がある。

【実践発表①】「既存の取り組みを活かしたコミュニティ・スクールの導入」

北海道士別市教育委員会社会教育課兼学校教育課　参事・社会教育主事　　藤田　泰昭

〇CS（コミュニティ・スクール）に取り組むのは、士別で育ち・学ぶことに誇りを持ち、豊かな人格を養うため（教育大綱の具現化）

〇ふるさとを愛する心（ふるさとを好きになる、ふるさとを創っていく）の育成が急務

〇導入にあたっての考え方

- 社会教育主事のスキルを活用
- 学校運営協議会と地域学校支援本部の一体化
- 学校評議員、学校関係者評価委員の廃止（発展的解消）
- 地区公民館職員に CS コーディネーターの役割を付与　など

〇学校の「負担感」を減らし、教育活動がよいものになっていくという「期待感」を高める。

〇CS は「子どもたちのことを考え、行動する場」

〇協議会では「意見の言える」、「私たちにできそうな」内容で話し合う。

【実践発表②】「CS の効果的な立ち上げ」

北海道上士幌町教育委員会　社会教育主事　　高橋　克磨

〇かみしほろ学園構想の２つの基本理念

基本理念１：幼児から高校生まで、一貫性のある教育環境づくり

基本理念２：地域総ぐるみで子どもの育ちに関わる仕組みづくり

CS 制度の活用と「ゆめ育」応援団の設立

〇CS についての基本的な考え

地域が学校を盛り上げ、元気な学校が地域の活性化を生むシステム

〇導入に向けて

- CS の指定は、教育委員会・校長の親切な説明が必要
- CS コーディネーターを中心に、「教員の困り感」を解消し、「地域の力」を効果的に活用できるよう運営していくことが重要
- 目的は子どもたちのために。学校・地域とのコミュニケーションの機会を多く持ち、目的への思いを共有し、期待感を高めることが必要
- 「学校を知ろう」からスタート。まずは、お互い（学校⇔地域）を知る活動を中心に行うことが必要

〇学校運営協議会と「ゆめ育」応援団は、“車の車輪”

- 協議会の熟議と「ゆめ育」応援団の実践
- 地域や学校の声を聞き、運営に活かしていく。子どもたちのためになにができるのか、支え合いながら進めていく。
- 地域の方も学校の教職員も負担にならないようなコーディネート（コーディネーター）が必要不可欠

〇子どもは、地域の様々な方とのコミュニケーションはもちろん、新たな体験から多くの学びが生まれる。

〇地域の方は、これまでの経験や自らの学びを活かすことができる。

〇学校は、生の教材を使った授業の展開などに役立てられる。

【実践発表③】「ふるさとの風土で育む人づくり・まちづくり」を目指す CS の導入

栃木県栃木市教育委員会　教育総務課　課長補佐　　木村　信孝

大平中央小学校　校長　　鈴木　廣志

〇CS 導入の趣旨

- とちぎ未来アシストネットで構築された学校と家庭、地域とのパートナーシップを、CS 導入により更に醸成し、学校と地域の活性化を図る。

〇CS 導入のポイント

- 学校評議員制度から CS へ

・とちぎ未来アシストネットを基盤としたCS
・小中一貫教育を支えるCS

〇CSの現況

・CSについての関係者への理解及び保護者や地域住民への周知を進める。
・CSを核に、各学校・学区における「とちぎ未来アシストネット」の推進を図る。
・小中一貫教育や教職員の多忙化解消（先生の働き方改革）と繋げた‘学校・家庭・地域’の連携協働を進める。
・‘立案から実施へ’CSの趣旨を踏まえた活用を図る。

〇CS導入を巡る不安、課題と解決のための方策

（不安、課題）

・委員の人選の問題
・学校運営協議会の議論の内容
・教育の公平性と校長のリーダーシップ
・教員の更なる負担増
・学校を核にしたまちづくりの展望

（解決のための方策）

・委員の様々な養成講座・学習機会を通して、学校理解と学校参画意識の変容を促す。
・校長の経営方針ビジョンを明確化し、学校・地域双方の課題解決を目指す。
・地域学校協働活動につながる公民館・図書館・社会教育施設・福祉施設・関係団体との協働による地域づくりの活動を促す。

〇学校支援型から参画協働型・地域協働型にシフトさせたい。

〇学校運営協議会委員の持つコーディネート力が新たなまちづくり・地域課題の解決のツールになっている。

〇学校の持つ教育機能の地域への還元・発信

【コーディネーターによるまとめ】

・既存の組織、活動をたばねるという認識で
・委員の意識改革（子どもたちにどう関わり育てていくかという当事者意識）
・主体的に関わってもらうための熟議
　課題の把握から具体的な取組へ
・導入がスタート…学校任せにすることなく教育委員会が支援
・地域協働活動は不可欠⇒社会教育、公民館などとの関わりが重要
・学校教育と社会教育とが一緒になって取り組んでいく。
・CSは地域づくりの一貫である。地域を盛り上げる手段の一つとしての仕組みだと捉える。
・「すべては子どもたちのため」

【パネルディスカッション】「地域の未来を創る子どもを育むコミュニティ・スクール」

＊主な意見

・将来、人口が半減する試算がされている。ここに住む高齢者が元気になるために、子どもたちとの関わりが重要だ。

・過疎だからこそ CS。学校が核となり地域を元気にする。

・地域の人が子どもたちを褒めてくださる。子どもたちはまたそこに行きたくなる。褒めてくださるということはしっかりと見てくださっているということ。

・地域でのおとなと子どもの関わりが増えることにより、子どもの表情が明るくなり、また、地域のために何かしたいと思う子が増えた。

・学校を支援してくださった人自身が、喜びを感じることができる。

・学校支援地域本部から CS へ。関わってくださる地域の人に対して、目的があることを意識してもらうことが大切である。

・企業の立場から、CS を通して世代、業種を超えた人々とのつながりができた。

・このまちで生まれてよかったと思う子どもたちが育ってくれるといい。

・CS を何のためにするのか。子どもたちをよりよくしていく、子どもたちが自分の力で将来を生きていく力を身に付させていくため。

・CS は、地域づくりにつながるもので、住民自治の基礎を創っていくものである。

「100 の CS があれば、そのやり方は 100 通りである。」という話がありました。それぞれの学校、家庭、地域の実情に合わせそこに生まれ育つ子どもたちをどのように育てたいかを共有し、その目的に向かって協働する。よって、２つと同じ CS はないということだと思います。

日野町に生まれ、日野町で育つ子どもたちが、自分の夢を実現するとともに将来の日野町を担っていくことができるように、CS の仕組みを整え、熟議を重ねて、具体的な活動をしていきたいと思います。

導入がスタートであるという示唆もいただいたので、まずは CS を導入し、実際に活動していきながら、「子どもたちのため」によりよい内容にしていければよいと思います。

参加者：日野町教育委員会事務局　　砂流　誠吾

日野町立根雨小学校　　川上誠之進